

身の回りの循環を考える

「循環と暮らし」に模様替えしたあと、第1号では「住環境とごみ」、この第2号では、編集陣が総力を挙げ、繊維リサイクルをめぐる話題として「ファッションと環境」を取り上げました。使わなくなった衣類のゆくえやそのリサイクルのあり方、衣類そのものの環境負荷から、そもそもおしゃれとは何かまで考えています。2011年1月22日には、廃棄物資源循環学会関西支部の主催により「市民と学生のためのセミナー：「衣」の循環」が開催され、参加してきました。突っ込みどころ満載のセミナーで、楽しく聞かせていただきました。他のセミナーと掛け持ちしていたため、最後まで席に座ることはできませんでしたが、おそらく議論沸騰であったことと思います。

容器包装リサイクルや自動車リサイクルなどは、日本では個別リサイクル法の対象とされていますが、法的にはリサイクルの対象とされていない繊維、その理由を“衣”の循環セミナーで講演された木村照夫先生（京都工業繊維大）は、有効なリサイクル方法がないためと考慮されています。木村先生が進められる多くの繊維リサイクルに関する研究開発プロジェクトで、いいリサイクル技術が用意されてくることを期待しなければなりません。加えて繊維製品のライフサイクルを通じての環境負荷は如何ほどか、どれだけの資源消費と手間がかかった産物であるのか、を今一度考える必要があるでしょう。セミナーで話された今一人の演者である岩地加世さん（工房「桜梅桃李」主宰）の綿栽培の涙ぐましい顛末をお聞きするとその想いはより強くなります。繊維リサイクル法といった法制度に頼らない循環がなされれば、もっともおしゃれなかもわかりませんが、ヒトの社会はそれほど賢明でないことも経験してきています。こうした点にも頭をめぐらせながら、おしゃれの考え方を含め、この「循環と暮らし」第2号を楽しく拝読したいと思っています。



Japan Society of Material Cycles and Waste Management

